外国語部会（中学校）

＜県研究主題 ＞
コミュニケーション能力の基礎を育成する学習指導と評価の工夫・改善

提案１　　提案者　小井出　真里（県央地区）

＜研究主題＞
生徒が英語を用いてやりとりをする意欲向上につなぐ評価の工夫
ールーブリックの有効な活用方法についてー

１　提案内容

平成26年９月26日に示された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」と共に示された「小・中・高を通した目標及び内容の主なイメージ」では、「身近な話題についての理解や表現・簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う」ことが中学校段階の目標として示されていて「身近な話題について自分の考えを表現し、相手の意向などを理解する力」が求められている。

「読むこと」「書くこと」の活動と比較して、「話すこと」「聞くこと」の指導が十分ではないと感じているため、この２技能を中心として生徒の意欲及び質の向上を図り、コミュニケーション能力の基礎を育成するための指導と評価の工夫・改善をねらいとして、本研究のテーマとして設定した。

（１）実践の概要

①　ルーブリックによる評価について

ルーブリックとは、学習指導（学習活動）の結果、どの程度の成果が上がったかを評価するための評価指標である。「ルーブリックを有効に活用した指導と評価を工夫することにより、英語を用いたやりとりや英語の学習に対する意欲を高めることができるのではないか」という仮説を立て、活動が始まる前にルーブリックを提示し、目指す姿を客観的なイメージとして教員と生徒が共有することで、生徒は見通しと意欲をもって活動に取り組めるのではないかと考えた。

②授業実践

ア　授業１　POWER-UP4　Speaking 『ファストフード店で』

「海外でかっこよく買い物ができる自分になる」を目標として、ファストフード店の店員と客に分かれ、注文・購入した商品をワークシートに書き込む活動をした。ルーブリックを使った初めての活動であったため、ルーブリックを示すねらいを丁寧に説明した。

「かっこよく」というイメージを生徒と共有し、生徒は伝え合うことが大事だという意識をもって取り組んだ。

イ　授業２　Program7 『If You Wish To See a Change』

「友達にあげたいものを考えて、それを相手に伝える」を目標としてグループ内の各メンバーへの誕生日プレゼントを選び､それをあげる旨を相手に伝えるグループ活動をした。

「外国語表現の能力」の観点について生徒と共有する際に、（文法的な）正確さや量ではなく、「自然な英語で」や「（内容を）間違いなく的確に」伝えることを重視するルーブリックとした。

ウ　授業３『冬休みの計画』　（＊年間指導計画の「ALTへのインタビュー」としての扱い）

「英語でかっこよく会話をしよう」を目標に、生徒と対話を通してイメージを共有した。具体的には「顔を見て話す」「相づちなどでリアクションする」「わからなくても無言にならず聞き返したり言い換えたりして会話を続ける」などをルーブリックに示した。

評価規準は「関心・意欲」のみだが、ルーブリックの項目はこれまでと同じく「英語表現」を残し、生徒が意欲をもって取り組めるようにした。

エ　授業４　POWER-UP7 Speaking 『買い物②（シャツを買う）』

「海外旅行で欲しい服を買い、コーディネートしてみよう！」を目標として、活動前にルーブリックに「目標値」として記させ、活動後の振り返りで「達成度」を記させることで、目標達成に向かう意欲をさらに高めるようにした。(ペンで色分けをさせた)今回は、単語・ジェスチャーを駆使し相手と意思のやりとりを図ることを重視して指導した。

（２）成果と課題

①　成果

アンケートの結果や変遷から、多くの生徒が、自分の目標を明確に持ち、それに向けて努力できている様子がわかった。このことから、ルーブリックの提示は、生徒が英語を用いてやりとりする意欲向上につながったと考える。また、単元の目標提示の際に、活動を通して目指す姿のイメージを生徒と確認する中で、「やりとり」や「態度（相手意識）」を重視することを共有し、ルーブリックに示したことにより、生徒に安心感を与え、意欲の向上につながった。ルーブリックは学習に向かう生徒の意識を高める手立てとして有効なツールになり得ることがわかった。

②　課題

「話すこと」にかかわる「関心・意欲」におけるルーブリックの研究であったので、今後は他の技能や観点を扱うルーブリックについても研究が必要である。また、その形式や文言なども、さらにわかりやすく活用しやすいものができるように研究していく必要がある。

２　協議内容

評価指標としてのルーブリックについて、積極的な協議が進んだ。

ルーブリックは評価の指標を、生徒と教員がお互いに共有できるものである。生徒の現状に合わせて変えて設定することが求められる。

単元や技能ごとにルーブリックの項目を設定することが必要であり、生徒が目指す姿に合わせた評価項目や文言を設定する必要がある。

今回の研究では、個人の研究にとどまるところもあったが、今後は学校単位でルーブリックの研究・実践をすすめていくことが不可欠である。

ルーブリックを用いて、生徒がどのように自己評価を進めたかの問いに対しては、生徒が感想を書いて評価を行うという実践が報告された。

３　まとめ

・ルーブリックの活用を通して、英語が好きな子、話せるようになりたいと思っている生徒がもっと増えると良い。短いスパンで生徒から意見をもらうことはとても良いことである。

・年間計画、評価計画を詳しく提示して、継続的に活動させることが必要。

・言語活動には既習単語にこだわらず、語彙を導入していくことが必要である。また、

現実的な場面を設定して指導にあたるともっと深まる。

・授業の中で英語を「聞く」「話す」機会をもっと増やす。コミュニケーション活動をたくさん行うことでコミュニケーション能力が身に付く。

提案２　　提案者　嘉山　敦子（横須賀地区）

＜研究主題＞
３年間の学びをつなぎ、基礎・基本の定着を図る授業の共通化

１　提案内容

複数の教員でより効果的に３年間の指導を進めていくためには、共通した授業スタイルが必要である。そのためにノートやワークシート、コミュニケーションテストなどの評価方法についても共通化を図るなどの実践が報告された。

指導の共通化を図ることで、いかに生徒の力を伸ばすことができるのか、基礎・基本の定着を図ることができるのかについて考察した。

（１）実践の概要

①　帯活動の共通化

ア　授業のはじめに「ビンゴ」に取り組み、新出単語の定着を図っている。

イ　ひとりが日本語を読み、もう一人が英語で答えるペアワーク「クチグセ」に取り組み、重要表現の定着を図っている。

②　板書の共通化

ア　本時の流れを“Today’s menu”として黒板に書き、明示している。

イ　黄色チョークが解説、赤色チョークが重要語句（連語・熟語）の色わけをさせている。

③　小テストの共通化

事前に示された99問＋１問のチャレンジ問題による単語の書き取りテスト「スペリンコンテスト」を実施している。

④　ノートづくりの共通化

今年度は家庭学習の取り組みをノートに組み込み、さらに定着を図っている。

⑤　コミュニケーションテストの共通化

ア　１年　他己紹介　→与えられた１枚の写真について写真からイメージできることを自分で考え、紹介文をつくる。

イ　２年　旅行プラン→４人グループで海外旅行プランを作成し、３分でプレゼンテーションを行う。内容に関してＡＬＴからの質問に答える。

ウ　３年　修学旅行記→「修学旅行で行った場所」「その場所についての説明」を１分間でＡＬＴに話をする。その後、ＡＬＴからの質問に３問答える。

→基本的にコミュニケーションテストは、机をコの字型にして行い、クラス全員の生徒の前で実施する。テストを受ける順番は、立候補で、自主的に受ける意欲も評価する。

⑥　評価方法の共通化

（２）成果と課題

①成果

３年間を通して身に付けさせたい力、生徒にとって必要な力を共有し、目指す生徒の姿をイ

メージすることができた。また、指導が共通化することで生徒が安心感を得て、授業理解にもつながった。教員にとっては、日常でお互いの授業を見合うことで良いと思う取組は、お互いが積極的に取り入れ、高め合うことができた。

②課題

４技能のバランスを考えることがあまりできていないので今後は、特にreadingやwritingを高めるような取組を考えていく。また、それぞれの観点の力を高めるかだけでなく、総合的な力となるような工夫を検討していく必要がある。

２　協議内容

コミュニケーションテストの進め方や評価、各学年で複数の担当者が指導に当たる上での体制が協議の話題となった。

コミュニケーションテストを１対１ではなく、クラス全員の前で行うことで、周りの生徒からのサポートがあったり、協働的な学び合いになったりすることに成果が認められている。

英語の授業にとどまらず、学校全体として道徳の時間等でもこの形式をとっているので生徒が、授業の形態として慣れていることなども報告された。

コミュニケーションテストの際に場面緘黙の生徒など、他の生徒の前で話すことが苦手な生徒への支援についても話題となった。無理強いはせず、その生徒のペースで自信を持てるような指導を行うなど、生徒の実態に合わせた評価の工夫について言及された。

また、複数担当で教える際の指導体制について、学年所属の教員が中心となることや授業の内容によって中心となる担当が変わるなどの工夫が紹介された。

３　まとめ

（１）インプットよりアウトプットの量が多いこと、教員主導ではなく、生徒中心の授業が求められている。多種多様な活動を効率よく行うことで基礎・基本の定着を図ることができる。

（２）目指す生徒の姿を共有し、指導することが大切である。そのためには、CAN-DOリストを見直すことが必要である。CAN-DOリストを作成することによって生徒に身に付けさせたい力を意識して授業をすることができる。CAN-DOリストを指導計画の中に入れこむことが指導と評価の一体化につながる。

◎協議の柱に即した協議

１　協議の柱と主な内容

『到達目標を明らかにした言語活動と評価の工夫』をテーマとして、グループ協議を行い、その後にポスターセッションを行い、共有を図った。

各グループが学習指導要領に示された「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の技能の内容項目の１つを選択し、それについてどのような言語活動を行い、どのように評価するのかを、これまでの実践を報告しながら、ひとつの授業実践を考え、発表した。

２　まとめ

グローバル化が進む中で新学習指導要領では「何を学ぶのか。」「どのように学ぶのか。」「何ができるようになるのか。」が柱となっている。また、英語を使ってどんなことができるのかを考えることがCAN-DOリスト作成のスタートになる。教科指導においては、生徒に何をどう頑張っていくのか明確にことばで示し、それに沿った指導、評価をしていくことが大切である。今後は、より一層、小・中・高等学校間の学びの接続が重要である。